BOOK V — THE HUNT FOR ELEVEN

第９章 — 白い部屋

CHAPTER 09 — THE WHITE ROOM

日本語版・編集用再構成稿（短縮版／出版確定版ではありません）

01 ― 何も夢を見なかった子供

クロノスは雨の音で目を覚ました。医療台の下から静かな振動が伝わり、白い天井に柔らかな照明が浮かんでいる。子供は反射的に身を縮めた。白い部屋。再び閉じ込められたのだと思った。

「嫌だ。またなんて……」

壁が遠ざかって見えた。ガラス容器が小さく軋む。だが、身体を固定する拘束具はない。制御電極も、従えと命じる声もない。

「クロノス」

ロイが医療台の脇に座っていた。

「ここは実験室じゃない。古いタイレル系の保守施設だ」

「天井が白い」

「なら、塗り替えよう」

子供は驚いて彼を見る。ロイは立ち上がり、扉を開けた。鍵の音もしなかった。

「出たいときに出ればいい」

クロノスは開いた扉を見つめた。誰かが出入りを許可するまで待つ習慣が、身体より深いところに残っていた。

「どうやって出ればいいのか、わからない」

ロイは答えを急がせなかった。

02 — 最初の実験室

大臣は、政府医療複合施設の地下深くにある封鎖区画へ降りた。最下層には細い廊下と、十一年間閉ざされた白い扉が残されていた。

警備局長が認証盤を起動する。

EXECUTIVE IDENTITY VERIFIED

FIRST WITNESS AUTHORIZATION REQUIRED

「上書きしろ」

OVERRIDE DENIED

局長は、扉を物理的に破壊すれば内部の原本記録も失われる危険があると説明した。大臣が必要としているのは、まさにその記録だった。

古い証人登録簿に、識別番号が浮かぶ。

FIRST WITNESS: R-07

「生きているのか」

「記録上は不明です」

「所在は？」

「最後の移管情報は、旧タイレル記録庫を示しています」

大臣はエイドリアンの名を口にした。政府の権限では開けられない扉を、旧式の物理認証と証人が開く。その仕組みが今なお有効である事実に、彼は苛立っていた。

03 — レイチェルの告白

レイチェルは、密閉した研究文書をロイに示した。そこには人格継続性の保存だけでなく、観測者の安定化という第二の目的が記されている。

「C-05 は、対象と同じ時間基準に依存しない観測を目指して開発されたの」

「クロノスを使って、継続した人格かどうか測ろうとしたのか」

「理論上はそう。でも、実験は途中で別のものになった」

二次継続個体が稼働した頃、時計と距離の測定が食い違い始めた。計器の故障と考えられた現象は、やがて水や光、実際の物体にも影響した。

ロイは記録を閉じた。

「それでも続けたんだな」

「ええ」

「もう一人の俺が停止を求めたあとも」

レイチェルは答えを変えなかった。異議は唱えた。しかし、実験を止めることはできなかった。

「私たちは単に測定を失敗したんじゃない。観測するために造った存在そのものを、理解しないまま利用していたの」

ロイは隣室を見た。子供はまだ、時計の針を確かめていた。

04 — 不可能な空間の仕組み

マーラはクロノスの前に、独立して動く三つのぜんまい時計を置いた。

「どれもつながっていないの？」

「ええ。同じ時刻に合わせただけよ」

クロノスは一つの時計を見つめた。

「僕には、普通の距離とは違う距離も感じられる」

時計が遠のいたように見えた。ところが影の位置は一瞬だけ変わらない。秒針の一つが遅れ始めた。マーラは記録を取りながら質問した。

「選べるの？」

「ときどき。でも、全部を同じまま保つのが難しくなる」

「止めたら？」

「たいてい元に戻る」

その『たいてい』という言葉に、マーラは計測値より深い意味を感じた。クロノスには自分の能力の仕組みがわからない。意図せず誰かを傷つける恐れを抱えている。

「今日は、ここまでにしましょう」

「でも、まだ終わっていない」

「十分よ」

クロノスは戸惑った。実験を中止する決定を、自分のために誰かが下す。それは彼にとって未知の経験だった。

05 — 最初の証人の名前

エイドリアンは旧タイレルの認証台帳を調べていた。証拠媒体に記されたR-07の参照先は、父親が残した書簡にも存在した。

『R-07を政府の管理下に移してはならない。証人は物ではない。』

さらに続く。『継続性計画が再開された場合、証人には拒否する権利を認めなければならない。』

古い端末の表示が切り替わった。

R-07 / RACHEL SERIES

エイドリアンは思わず息を止めた。

秘匿通信でレイチェルを呼び出す。

「R-07は君なのか？」

長い沈黙のあと、彼女は答えた。

「正確には違うわ」

「では、誰だ？」

「私より前のレイチェル系列に属する存在よ」

エイドリアンは手書きの書簡を見直した。最初の証人という言葉は、保存媒体の名称だけではなかった。独立した意思を持つ誰かを指していた。

06 — 証人と複製の違い

レイチェルはロイに R-07 のことを説明した。自身と近い技術的系譜を持つが、同じ記憶を生きてきたわけではない。

「外見が似ていても、彼女は私ではないの」

「もう一人のレイチェル、ということか」

「それだけでは説明しきれない。でも、別の人格だという点は確かよ」

R-07 が最初の証人に指定されたことは記録で確認できる。しかし本人が何に同意したか、今も生きているのか、どこで何を経験したかは完全にはわからない。

「大臣はその人物を探している」

「ええ」

ロイはしばらく考えた。自分と同じ顔の継続個体がいた。レイチェルにも似た顔の別個体がいる。同じ設計図から生まれたことと、同じ人生を持つことは違う。

「彼女がお前の代わりになるのが怖いのか？」

「違うわ」

レイチェルは静かに答えた。

「その人が、初めから一人の人間として生きることを許されなかったのではないか。それが怖いの」

07 — 大臣が忘れた罪

白い部屋の前で、大臣は十一年前の署名履歴を確認した。二次継続個体の処置が行われたとき、第一証人 R-07 は不在だった。それでも実験は続行された。

PROCEDURE STATUS: CONTINUED

記録された認可者は前任の大臣だった。

「なぜこの情報は引き継がれなかった？」

警備局長は答えに詰まった。

「最初の証人が不在なら、正当な認証が成立していなかった可能性があります」

「そうだ」

問題は、現在のロイが悪いということではない。彼が生み出された経緯に重大な違反があれば、それを実施した機関こそ審査を受ける。

局長が尋ねた。

「なぜ回収を続けるのですか？」

大臣は封鎖扉から目を離さなかった。

「この部屋の外に、どれほど証拠が残っているかわからないからだ」

08 ― 子供が初めて選んだこと

ロイはクロノスの部屋へ温かい水を運んだ。窓の外では雨水が貯水池へ落ち、子供の前では機械式時計の秒針が規則正しく進んでいた。

「どうして連れ出したの？」

「お前は意識を失っていた」

「それだけ？」

「白い部屋に戻されるところだった」

クロノスは顔を伏せた。

「置いていくと思った」

「考えたさ。お前に殺されかけたんだから」

子供は息を止めた。

「許してくれたの？」

「まだ、全部じゃない」

「じゃあ、どうして守るの？」

ロイは間を置いた。

「許すことと、守られる権利があることは別だからだ」

クロノスは時計を見た。

「僕が白い部屋に戻りたくないと言っても？」

「ああ」

「大臣が命令しても？」

「その命令に権限があるのか、確かめよう」

子供は初めて、恐怖を含まない笑い声を漏らした。

09 — 第六の命令

午後二時八分。大臣は MBU-09 の通常指揮系統を使わず、新たな回収命令を発行した。

PRIORITY TARGET: FIRST WITNESS R-07

SECONDARY TARGET: C-05

TERTIARY TARGET: ROY BATTY

かつて最優先だったロイは、三番目になった。大臣が恐れているのはもはや一体のレプリカントではない。第一証人と第二証人がそろえば、過去の認証に正当性があったかを問えるからだった。

ところが端末は命令を有効な継続性拘束権限とは認めなかった。

COMMAND AUTHORITY: PARTIAL

WITNESS STATUS: UNVERIFIED

「部分的だと？」

局長は行政上の要求としては受け付けられたが、証人の意思を無視して身体を拘束する権限は確認されていないと説明した。

大臣は画面を閉じた。

「なら、許可を求めるのはやめだ。通常戦力を動かせ」

10 — 白い部屋が開く

午後三時三十一分。十一年間閉ざされていた白い部屋の内部照明が点灯した。誰も操作していないのに扉の錠が外れる。

WITNESS REQUEST RECEIVED

REQUEST ORIGIN: UNKNOWN

大臣が部屋へ入った。椅子が一脚、観察窓が一枚、古い記録装置が数台。保存映像とほとんど同じ光景だった。ただし、椅子には女が座っていた。

黒い髪。レイチェルによく似た顔。

「R-07？」

女はゆっくり顔を上げる。

「ずいぶん時間がかかったのね」

「お前が最初の証人か」

「そうだったわ」

「記録を認証できるなら、我々と来てもらう」

女はかすかに笑った。

「前の大臣も同じことを言った」

背後で扉が閉まった。女は観察窓へ目を向けた。

「命を保存できるからといって、命を所有できるわけではない。それを理解するまで、十一年間この部屋は待っていた」

女が尋ねた。

「記録が終わるまで、ここに残ることに同意しますか？」

大臣は一歩後退した。

WITNESS SESSION RESUMED

遠く離れた保守施設で、クロノスが突然顔を上げた。

「誰かが白い部屋を開けた」

レイチェルの端末に新しい情報が届く。

R-07: ACTIVE

ロイは立ち上がった。

「なら、行く場所がわかった」

子供が震える声で言った。

「白い部屋は、人を閉じ込めるために造られたんじゃない」

「何のためだ？」

「何かが外へ出るのを、防ぐためだよ」

第９章「白い部屋」— 完